

現代社会と感染症：私たちにできる予防とは

自治医科大学 感染・免疫学講座 感染症学部門

教授 畠山 修司

現在、新型コロナウイルス感染症は夏と冬に、インフルエンザは冬に、季節や気候に関連して流行がみられています。厚生労働省の人口動態統計によると、新型コロナが原因で亡くなった人は2024年夏までに13万人を超え、その3分の1は2023年5月以降の流行で亡くなったとされています。これらの疾患は、特に高齢者において非常にリスクが高いため、しっかりと予防しておく必要があります。

新型コロナウイルスが世に現れてから5年半が経ちますが、社会に与えた影響は甚大でした。2023年5月に新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に移行するまで、マスク着用や社会的距離の確保（人ごみを避け、人との距離を保つ）などの感染対策が徹底されたことで、新型コロナ以外の感染症の発生も大きく抑制されていました。新型コロナ以外の感染症にかかったり、予防接種を受けたりする機会が減ったことで、免疫（抵抗力）を持たない、あるいは減弱してしまった人が増えました。その結果、最近では、季節性インフルエンザ、マイコプラズマ、百日咳、麻疹（はしか）、溶血性レンサ球菌など、ここ数年で最多の発生数を記録する疾患が増え、感染症

に対する関心はますます高まっています。

一方、梅毒、クラミジア感染症、淋（りん）病といった性感染症は、コロナ禍においても減少することはなく、むしろ増加しました。なかでも梅毒は、過去最多を上回る勢いで急増しています。決して昔の病気ではなく、性行為によって誰でも感染する可能性のある身近な病気だと言えます。個人だけでなく社会レベルでも、十分に予防や対策を講じなければならない状況です。

本講演では、自分や家族を守るために、今こそ知っておきたい感染症として、インフルエンザ、新型コロナ、带状疱疹、そして梅毒を取り上げます。最新の予防法やその科学的根拠についても紹介します。

- 1 インフルエンザ：コロナ禍ではインフルエンザの流行は限られたものでしたが、2024 年冬から 2025 年春には、過去最大規模の流行になりました。今年から、インフルエンザの予防接種に、65 歳以上の方への有効性が向上した、新しい選択肢が加わります。
- 2 新型コロナ：特に冬季の栃木県では、脳卒中や心筋梗塞の増加に加え、インフルエンザと新型コロナの流行が相まって、救急医療体制のひっ迫が繰り返し起こっています。今年の冬は、予防接種をどのように活用し、新型コロナを予防するのが良いのでしょうか。

- 3 帯状疱疹：2025 年 4 月から、帯状疱疹の予防接種が、65 歳以上の方に対する定期接種として新たに加わったことをご存じでしょうか。この予防接種は、帯状疱疹や帯状疱疹後疼痛などの合併症が予防できるだけでなく、認知症や脳卒中の予防につながる可能性があることもわかってきました。
- 4 梅毒：栃木県では、2024 年の梅毒報告数は 185 人と、過去最多の 2023 年(171 人)を上回りました。しかも、女性の感染者では 20 代(34%)に次いで 10 代(24%)が多いのが栃木県の特徴です。女性の 4 人に 1 人が 10 代というのは、きわめて憂慮すべき事態であり、市民と医療従事者が協力し、早急に予防等の対策を講じる必要があります。

《講 師 略 歴》

氏名 畠山 修司 (はたけやま しゅうじ)

《学歴及び職歴》

2005 年 3 月 博士 (医学)

2005 年 東京大学医学部附属病院

感染症内科医員・感染制御部 助教

2010 年 東京大学医学部附属病院

感染症内科 特任講師/副科長

2015 年 自治医科大学 総合診療部門 准教授

2018 年 自治医科大学 総合診療部門 教授

2019 年-現在 自治医科大学地域医療人材育成部門長（兼任）

2023 年-現在 自治医科大学 感染・免疫学講座 感染症学部門 教授

自治医科大学附属病院 感染症科 科長

《代表的著書》

内科学「治療学総論・感染症に対する薬物療法」

（朝倉書店 2023 年）

ワシントンマニュアル「感染症の治療」（翻訳）

（メディカル・サイエンス・インターナショナル 2021 年）

レジデントのための内科クリニカルパール1000（翻訳）（医学書
院 2019 年）Medical Practice「不明熱の臨床-不明熱で終わらせな
いためのエビデンスとアート」（編集）（文光堂 2016 年）